《敦煌寫本研究年報》第十八號（2024.03）105–124 頁

「孔子項託相問書」漢文寫本研究*

A Study on the Chinese Manuscripts
"Dialogue between Confucius and Xiang Tuo"

髙井 龍

はじめに

本稿は、敦煌文獻「孔子項託相問書」の漢文寫本を取り上げ、各寫本の特徴と相互の關係を明らかにするとともに、複數の寫本に見られる複雑に入り亂れた文章の實態を浮かび上がらせ、これまで翻刻の底本とされてきたP.3883獨自の文章や特徴、及びそこに潛む問題を考察するものである。

「孔子項託相問書」の漢文寫本は、S.395、S.1392、S.2941、S.5529、S.5530R、S.5530V、S.5674、P.3255、P.3754、P.3826V、P.3833、P.3882、P.3883、BD15450、Дx1356 ＋ Дx2451、Дx.2352 ＋羽033、羽617の十七點がある。S.5530は表裏それぞれに書かれているため、別箇に扱う必要がある。また、P.3826Vは「孔子項託相問書」という題目のみを記すため、内容の考察には關わらない。他に、チベット語寫本もS.724、P.992、P.1284の三點が確認されている。

この故事は、孔子が項託との議論において常に言い負かされ、最後に項託を殺すという内容である。儒教社會において、決して公的な場で取り上げられない故事でありながら、漢代以降長く中國に根付いた故事であった[1]。

「孔子項託相問書」に對する先行研究は數多い。しかし、その寫本に對する理解は未だ十分に浸透していないのが現狀である。本稿は、まず歷代の翻刻資料からは窺うことのできない各寫本の特徴を考察する。次に、書寫方法や脱文等の特徴

---

*本稿は、2023年9月2日に開かれた2023年中國中世寫本研究夏季大會（於：佛教大學紫野キャンパス1號館408・409教室）における發表原稿「「孔子項託相問書」寫本研究」に加筆修正したものである。發表時、諸先生方より多數の御教示を賜った。ここに深謝申上げる。

[1]金文京「孔子の傳說——「孔子項託相問書」考」說話と說話文學の會編『說話論集』第16集（說話の中の善惡諸神）、清文堂、2007年、237–264頁。陳東「漢畫像石"孔子見老子"其實是孔子助葬圖」『孔子研究』2016年第3期、50–61頁。

が一致する寫本の比較を行い、幾つかの寫本の相互關係を考察する。そして、多くの寫本に混亂が見られる文句や文章を取り上げ、その複雑な傳寫の様相を明らかにする。それを踏まえ、これまでの翻刻資料の底本とされてきたP.3883を取り上げ、この寫本を底本とする際に注意すべき點を指摘する。實のところ、「孔子項託相問書」は、寫本ごとの文字や文章の差異が大きい。なぜこのような寫本の傳承が起ったのか、最後に少しく卑見を提示したい。

第一章　先行研究と本稿の課題

「孔子項託相問書」は、これまで多くの研究が進められてきた。以下、主要な先行研究を取り上げて、これまでの研究史を振り返ってみたい。

まず、初期の優れた研究として、ミシェル・スワミエ氏の論文がある。同氏は「孔子項託相問書」のチベット語寫本と漢文寫本雙方の翻刻と譯文を提示し、モンゴル、タイ、日本に廣まった當該故事を紹介する。また、古典文獻に見える孔子と項託にまつわる資料を收集し、當該故事の歴史と民間傳承を探求する[2]。この成果は早くから識者に注目され、高く評價されてきた[3]。朱介凡氏は、敦煌變文の目錄とともに、孔子と項託に關わる古典籍の記述を博搜し[4]、金岡照光氏は「晏子賦」等の賦とともに對話體という點から「孔子項託相問書」の特徴を指摘した[5]。張鴻勛氏は先秦から晉までの孔子の師の傳說をまとめ、隋唐代における「孔子項託相問書」の形成を探り、明代以降のこの故事の發展をまとめる。なお、同氏には吐魯番文書「孔子與子羽對語雜抄」（アスターナ134號墓文書）に關する論考もある[6]。劉長東氏も項託の人物像の由來やその神格化を考察し、「孔子項託相問書」の民間故事としての性格を考究する。その中で、三教論衡との關わりがあること、また孔子の聖性や中國の正統文化を否定する働きを持つことを指摘する[7]。鄭阿財氏は

[2]Michel Soymié, “L’Entrevue de Confucius et de Hiang T‘o”, *Journal Asiatique*, Tome 242, No.3–4, 1954, pp.311–392.

[3]日本の敦煌文學研究を牽引した金岡照光氏は、孔子と項託の對話の考察が、スワミエ氏の「論證で盡きている」と述べ、自らの解說を控えたことはその一例である（金岡照光編『敦煌出土文學文獻分類目錄——スタイン本ペリオ本』（西域出土漢文文獻分類目錄IV）、東洋文庫、1971年、219頁）。

[4]朱介凡「燉煌文獻目錄及「孔子項託相問書」之傳承」『大陸雜誌』第22卷第7期、1961年、10–15頁。

[5]金岡照光「論敦煌本對話體文獻」『東洋學研究』第11號、1977年、21–38頁（金岡照光「I・三・（一）對話體類」金岡照光編『講座敦煌9敦煌の文學文獻』（大東出版社、1990年）に加筆あり）。

[6]張鴻勛「《孔子項託相問書》故事傳承研究」『敦煌學輯刊』1986年第1期、28–40頁（再錄：同『敦煌俗文學研究』、甘肅教育出版社、2002年）。同「《唐寫本孔子與子羽對語雜抄》考略」『敦煌學輯刊』1984年第1期、55–63頁。

[7]劉長東「孔子項託相問事考論——以敦煌漢文本《孔子項託相問書》爲中心」『四川大學學報（哲學社會科學版）』2003年第2期、61–71頁。

「孔子項託相問書」各寫本の書誌情報を簡潔に紹介するとともに、この故事の來歴を考察し、その生成には六朝時代の玄學や唐代の三教論衡との關わりがあると指摘する[8]。それを受けて、朱鳳玉氏もまた敦煌文獻中の問答體の文學文獻に見られる三教論衡の影響を探り、「孔子項託相問書」に對する鄭氏の指摘を支持する[9]。なお、三教論衡に着目した論考として、丁淑梅氏の研究もある[10]。伏俊璉氏は「孔子項託相問書」を民間故事の賦として位置付け、押韻に着目する。また、その問答體と『楚辭』「天問」や『漢書』「東方朔傳」との關連を指摘するとともに、『逸周書』「太子晉解」との比較を通して形式の類似を指摘する[11]。金文京氏は、この故事の概ねの翻譯と『戰國策』以來の關連する傳世文獻の記述をまとめ、明代以降の當該故事の傳承や東アジアにおける傳承をまとめる。そして、項託への信仰とその由來を探る。また、佛教が漢代以來の老子と孔子と項託の傳承を利用することによって、道教による老子化胡說に對抗したと指摘する[12]。劉佳林氏は、孔子と項託の故事の淵源を考察し、その歷史的要素と神話的要素を分析する[13]。近年では、伏俊璉等が敦煌文獻に對する寫本研究に取り組み、P.3883 について寫本の基礎情報をまとめる[14]。

その他にも、「孔子項託相問書」の成書年代や壯族の民間故事との比較を行った研究等もあり[15]、また敦煌文獻中のチベット語寫本の「孔子項託相問書」やベトナム語の「孔子項託相問書」に對する研究もある[16]。更に、一般的な敦煌文獻の概說書等を繙けば、「孔子項託相問書」に關する記述は多數あり、また新出資料としての紹介文もあるが、最早それらは枚擧に遑がない。ここでは基本的な先行研究を通して、孔子と項託の故事がおよそ二千年の歷史を持つこと、及びその故事の源

[8]鄭阿財「敦煌寫本「孔子項託相問書」初探」『法商學報』24 期、1990 年、433–460 頁（再錄：同『敦煌文獻與文學』、新文豐出版公司、1993 年）。

[9]朱鳳玉「三教論衡與唐代爭奇文學」『敦煌研究』2012 年第 5 期、80–85 頁。

[10]丁淑梅「唐代弄孔子優劇的俳諧意趣」『煙臺師範學院學報（哲學社會科學版）』第 23 卷第 2 期、2006 年、83–86、90 頁。

[11]伏俊璉「《孔子項託相問書》體制探源」『敦煌學輯刊』2005 年第 3 期、1–5 頁。

[12]注 1 金文京論文。同「『玉燭寶典』所載『法沒盡經』に見える老子・孔子・項橐三聖派遣說」『東方宗教』第 117 號、2011 年、1–17 頁。

[13]劉佳林「敦煌本《孔子項託相問書》的神話色彩與歷史考」『文化學刊』2019 年 01 期、223–224 頁。

[14]伏俊璉等『敦煌文學寫本研究』「27．P.3883 寫本研究　孔子項托相問書」、上海古籍出版社、2021 年、245–251 頁。

[15]李江峰「敦煌本《孔子項託相問書》成書時代淺探」『河西學院學報』第 20 卷第 1 期、2004 年、28–31 頁。（參照：伏俊璉『敦煌文學文獻叢稿』（中華書局、2004 年（增訂本：2011 年））に「《孔子項託相問書》的寫作時代與體制特徵」を收める。李江峰との共同執筆による）。陳金文「“竹生甲兵”母題生成新探」『廣西民族大學學報（哲學社會科學版）』第 30 卷第 2 期、2008 年、146–150 頁。

[16]馮蒸「敦煌藏文本《孔丘項託相問書》考」『青海民族學院學報（社會科學版）』1981 年第 2 期、6–22 頁。陳踐「敦煌古藏文 P.T.992「孔子項託相問書」釋讀」『中國藏學』2011 年第 3 期、96–105 頁。王昆吾・何仟年「越南本《孔子項橐問答書》讕論」項楚・鄭阿財主編『新世紀敦煌學論集』、巴蜀書社、2003 年、239–257 頁。

流に對する考察や明代以降の資料との比較、アジアにおける傳播について様々な研究が進められてきた點を指摘しておきたい。また、「孔子項託相問書」を文學文獻として位置付けた研究が多く見られることも一つの特徴である。ただ、「孔子項託相問書」は學士郎によって書寫されていたことが確認される（後述）。それは恐らく、文學文獻としてではなく、童蒙書として位置付けられる側面を強く有することを示していよう。もう一つの問題は、各寫本の特徴や相互の關係を探求する研究が進められていないことである。これまで「孔子項託相問書」の各寫本の箇別研究やそれに基づく比較研究が長らく進められなかった背景には、「孔子項託相問書」の寫本數が極めて多いことや、寫本間の文字や文章の異同が散見されるために、その一つ一つにこだわってはあまりに煩瑣であること等、種々の要因が考えられる。しかし、先學の校訂した定本に依據することがあまりに一般的となり、各寫本の相違が今に至るまで十分に考察されてこなかったことは、看過して良い問題ではないだろう。本稿はこの點に着目し、以下に「孔子項託相問書」漢文寫本の比較考察を行う。まず次章では、漢文寫本全體の概觀と、注目すべき特徴を持つ寫本を取り上げる。

第二章　特徴ある寫本の箇別考察

「孔子項託相問書」の漢文寫本の數は十七點に及ぶ。そのうち、概ねの内容が書寫されている寫本は、S.395、S.1392、S.5674、P.3833、P.3883 の五點である。一方、寫本が一紙のみである寫本は、S.2941、S.5530、P.3255、P.3754、P.3882、BD15450 の六點ある。そのうち、S.5530 は表裏それぞれに「孔子項託相問書」が書かれており、P.3754 は表から裏へ内容の斷絶なく繼續書寫されている。

寫本の形態は、基本的に卷子本が多いが、S.5674 は高さ僅か 5cm の特殊な形態の卷子本である。册子本は、S.5529、P.3833、Дx1356 ＋ Дx2451 の三點である。

識語を有する寫本は S.395 と羽 617 の二點である。S.395 には「天福八年癸卯歲十一月十日淨土寺學郎張延保記」とあり、羽 617 には「維大晉天福八年歲次癸卯十二月七日靈圖學郎曹善昌寫過之身書手」とある[17]。天福八年は 943 年にあたる。これを基礎として、他の寫本についても併寫文獻の年代や筆や紙から寫本の年代を考えるに、「孔子項託相問書」は概ね 10 世紀に書寫された文獻と想定することが妥當と考える[18]。

[17]羽 617 の曹善昌は、P.2482Pièce に見られる曹喜昌と同一人物かと疑う。羽 617 は自署であり、P.2482Pièce は自署ではない。このことから考えるに、善に作るのが正しいであろう。

[18]馮蒸氏（注 16）は、チベット語寫本の一つ P.1284 が 10 世紀文獻である可能性を指摘する。

以上の理解を踏まえ、次に特徴ある寫本を四點取り上げる。ただし、P.3883 のみは本稿の最後に別に取り上げるため、ここでの言及は控える。

（一）S.5674

當該寫本は、高さ 5cm ×幅 165cm である[19]。これは掌に收まる大きさである。册子本に同じく攜帶用と考えられるが、一般的な册子本の三分の一程度の高さである。一行は概ね六文字から八文字である。敦煌文獻には他にもこのような形態の寫本が見られるとはいえ、その數は決して多くなく、當該故事でも唯一である。

首題は「孔子共項託相問書一卷」とある。この首題は、他には P.3826V にのみ見られる。尾題は「孔子共項託一卷」であり、こちらでも「共」字が使われている。あまり用例が多くないとはいえ、元來中國の通俗的な文獻の題目は一定しないことが多いものであり、このような題目も使用されていたと考えればよい。

當該寫本の冒頭部分は痛みが激しい。これは、一つには幾度も寫本の開閉を繰り返したためであろうが、それ以上に、冒頭部分が外側に來るように寫本を結末部分から卷き、冒頭部分が直接掌で押さえられる狀態にあったことによるのであろう。

（二）P.3826V

當該寫本に書かれた「孔子項託相問書」に關する記述は以下の三行である。

昔者夫子
孔子共項託相問書一卷
孔子項託永興□寫

「孔子項託相問書」の内容としては、一行目に冒頭の四文字「昔者夫子」を記すに過ぎない。上述の通り、二行目の題目が S.5674 に一致する唯一の寫本である。また、三行目の「孔子項託」の四文字は、およそ題目の略稱として書寫したものであろう。S.395 の尾題にも「孔子項託一卷」と書かれている。

當該寫本には、最後に書寫した人物の署名がある。識語のある寫本は S.395 と羽 617 に限られるため、執筆者名が書かれていることは貴重な記錄である。その字は、まだ筆を習い始めたばかりの人物のものであり、拙劣と言わざるを得ない。それは、「孔子項託相問書」を書寫した人物に關する情報ともなっている。

（三）P.3833

當該寫本は、冒頭から誤字が散見される。また、その量は、他の寫本にはあまり類を見ない多さと言える。ここで、冒頭部分を拔粹し、それを例示する。誤字で

[19]國際敦煌プロジェクト（International Dunhuang Project：http://idp.bl.uk）の書誌情報による（2023 年 11 月 25 日最終アクセス）。

あることを示すために、修正字等を併せて示す。

> 昔者孔（夫）子東遊，行至經（荊）山之下，路逢三箇小兒。二小兒作虚（戲），一小兒不作虚（戲）。夫子怪小兒（而）問曰：「何不虚（戲）乎？」小兒答曰：「大喜（戲）相煞，小虚（戲）相相（傷），虚（戲）而無公（功），衣被（破）裏空。藉（相）［隨擲］食（石），不而（如）歸春。

冒頭の「昔者孔子」は通常「昔者夫子」に作る。「孔」でも意味は通じるが、「孔」に作る寫本は他に一點もない。一箇所「喜」に作るのは、「虚」の音通として誤寫したものであろう。なお、「戲」をほぼすべて「虚」に誤寫する。この引用箇所以外でも「戲」を正しく書いた箇所はない。このような音通字による誤寫は、他の寫本に比しても多いと言える。また、孔子が項託に尋ねる時の句「夫子怪小兒問曰」は、他の寫本はすべて「夫子怪而問曰」に作る。「而」を「兒」に誤寫し、それを誤寫と氣付かなかった人物が、「小」字の脱落と考え、「小」を「兒」の上に補った結果であろう。

この寫本は、上掲以外の文章においても誤字は散見されており、文字通りに讀むならば、理解が困難な箇所がある。當時、音通であることによって幾つかの文字を正しく理解できたとしても、内容の正確な理解は他の寫本ほどには得られないだろう。

（四）Дx1356＋Дx2451

當該寫本は册子本である。前後ともに缺損しており、中間部分を殘す。現存部分は一葉ウから五葉オと數えられるが、錯簡のため、現狀のままでは正しく讀むことはできない。順序を整理すると、二葉オ→二葉ウ→四葉オ→四葉ウ→五葉オ→三葉ウ→三葉オ→一葉ウとなる。このような錯簡がいかにして起こったのかは今詳らかにしない。また、順序を整理しても、二葉ウと四葉オの間、三葉ウと三葉オの間には内容の缺損がある。他の寫本に見られる文字量から推定するに、いずれも一葉を失ったものと考えられる[20]。つまり、當該寫本は、冒頭と結末の缺損とともに中間部分の二箇所に一葉ずつの缺葉があり、且つ錯簡していることになる。

執筆者はあまり能筆家ではなく、半葉の文字數や行數も一定していない。一葉ウでは韻文を六行書寫するが、二葉オと四葉ウでは散文を八行、四葉オでは散文を九行書寫する。

文字において注目されるのは、「少」と「小」の混用である。項託を指す語として繰り返し使われる「小兒」をはじめ、「小」を正しく「小」と書寫するものは五

[20] この錯簡については次の論文に指摘がある。張涌泉「新見敦煌變文寫本敘錄」『文學遺産』2015年第5期、130–152頁。

回、殘りの十二回はすべて「少」と書かれている。兩者は時に書き間違えることがあるとは理解されるが、當該寫本の誤寫の量は甚だ多い。それが、もとの寫本を引き寫した可能性も否定はできないとはいえ、「孔子項託相問書」を傳寫してきた人々の識字水準を窺わせる特徴である。なお、類似の狀況はS.5529にも見られており、そこでは全十一回使われるべき「小」字のうち、十回「少」字を用いる。

第三章　系統の近い寫本の考察

現存寫本を相互に比較すると、一部の寫本には、何らかの關係があったと思しい特徴が見られる。それらは、必ずしも系統を同じくするとまでは言い得ないものもあるが、祖本に何らかの關係はあったであろう。

（一）S.1392とP.3833

S.1392の首題には「……相問書一首」とある。「一首」とするのは、この故事の後半が韻文であることによるのであろう。また、Versoに書寫された雜文の中、第9行目に「孔子項託相問書一首　昔者夫子」の文字が書かれており、やはり「一首」に作る。S.1392以外の寫本では、P.3833の首題に「孔子項託相詩一首」とある。題目は異なるが、こちらは明確に題目に「詩」の文字を使っており、より「一首」に合致する。

兩寫本の共通する特徴として最も着目されるのは、脱文の一致である。孔子と項託の問答のうち、項託の答えた言葉と、その後新たな問いを立てる孔子の言葉を拔粹する。

S.1392

小兒𥁕曰：「土山無石。井水無魚。空門無關。轝車無輪。泥牛無犢。木馬無駒。斫刀無環。營火無煙。仙人無婦。玉女無夫。冬日不是。下日有餘。孤雄無雌。枯樹無枝。空城無使。」小兒答曰：「吾不遊也。（以下略）

P.3833

小兒答曰：「土山無石。正水無魚。空門無關。巳車無輪。泥牛無讀。木馬無駒。斫力無環。螢火無惆。仙人無父。何女無夫。冬日不是。下日有餘。孤雄無觜。枯樹無之。空成無便。」小兒答曰：「吾不遊也。（以下略）

まず、兩寫本は、「空城（P.3833作「成」）無使。」と「小兒曰」の間に「小兒無字。」夫子曰：「善哉！ 善哉！ 吾與汝共遊天下，可得已否？」」の二十二字が脱落

している。また、「冬日不是。下日有餘。」の二句は、本來「是」を「足」に作り、「下」を「夏」に作るべきである。「孔子項託相問書」の寫本の中で、それぞれ誤って「是」と「下」に作る寫本はこの二點を除いて他にない點でも一致が見られる。

また、第四章で取り上げるように、『論語』に基づく表現を用いた會話部分にも、兩寫本の文章が一致する。

これらの點から考えるに、兩寫本は何らかの關係があったと思しい。ただ、注意を要するのは、兩寫本には異なる文字や異なる脱文も少なからず存在することである。それは、上に引用した文章からだけでも理解できる。つまり兩寫本は、祖本が同じであったり近い關係にあったものの、その後幾度も傳寫されていく過程において、幾らかの差異が生じた後の寫本の姿を反映したものと言い得るであろう。

（二）S.5530R と S.5530V

當該寫本では、同一寫本の表裏にそれぞれ「孔子項託相問書」が書かれている。兩者に同じ文章が確認される以上、表から裏に引き繼いで書寫したのではなく、別々に書寫したことが分かる。兩者の内容を比較すると、誤字や通用字の使用等、細かな點で一致する文句や特徵がある。よって、兩者の底本が同じであったことが分かる。

まず、項託の言葉を擧げる。車が城を避けるべきか、城が車を避けるべきかについて、項託が答える場面である。この場面は、恐らく以下の文章であるべきと考えられる。なお、引用は S.5530V の寫本缺損に合わせて、項託の言葉の途中から引用する。

> 上知天文，下知地理，中知人情，從昔至今，只聞車避城，豈聞城避車？」
> 夫子當時無言而對答

この文章を、當該寫本の Recto と Verso はそれぞれ以下のように作る。

> Recto
> 上至天文，夏知地理，中之人……今，只問車避城，避車？」夫子無言而對。
>
> Verso
> （前缺）至天文，夏知地理，中之情，從昔至今，只……問城避車？」夫子無言而對答。

兩者は完全に一致するわけではないが、文字の脱誤の一致は少なくない。そして、以下に見る他の箇所の一致を併せ考えるならば、Recto と Verso の密接な關係

は十分指摘できる。

二つ目は、孔子が項託を「汝年雖少，知事甚大。」と褒め讃える文句である。両者は、いずれも「雖」を「須」に作り、「少」を「小」に作り、「事」を「是」に作る。

Recto ／ Verso
汝年須小，知是甚大。

次は、孔子と項託の問答に見られる項託の返答の一節である。他の寫本と併せ考えるに、本來は次のような文句であったと考えられる。

螢火無煙。仙人無婦。玉女無夫。冬日不足。夏日有餘。孤雄無雌。枯樹無枝。空城無使。小兒無字。

この文章を、兩者はそれぞれ以下のように書寫する。

Recto ／ Verso
榮火煙。仙人無婦。玉女無夫。冬日不足。夏日有餘。孤雄。枯樹無枝。空城無所。小兒無字。

更に、項託が孔子に博戯に誘われた際、それを拒否する場面がある。本來の文章は以下の通りである。

吾不博戯也。天子好博，風雨無期；諸侯好博，國事不治；吏人好博，文案稽遲；農人好博，耕種失時；學生好博，忘讀詩書；少兒好博，笞撻及之。

この文章は、以下のように書かれている。

Recto
不博戯也。夫子好博，風雨無期；諸侯好博，國事不治；央人好博，文案稽遲；農人好博，耕種失時；學生好博，忘讀詩（以下缺）
Verso
不博戯也。夫子好博，風雨無期；諸侯好博，國事不治；央人好博，文案稽遲；農人好博，耕種失時；學生好博，忘讀詩書；小兒好（以下缺）

以上の例からは、多くの文字の脱誤だけでなく、正確に書寫している字句も多く一致することが分かる。それは、兩者の底本とした寫本が同じであったことを認めるに足るものであろう。

（三）P.3754 と羽 617

この二點の寫本では、まず孔子が項託に對して風、雨、霜、露の由來を尋ねる文章を取り上げる。この文章は、多くの寫本が次のように四字句に作る。

汝知天高幾許？ 地厚幾丈？ 天有幾樑？ 地有幾柱？ 風從何來？ 雨從何起？ 霜出何邊？ 露出何處？

しかし、P.3754 と羽 617 のみこの後半部分を五字句に作る。

P.3754 ／羽 617
汝知天高幾（羽 617 作「機」）里？ 地厚幾丈？ 天有幾樑？ 地有幾（P.3754 無「幾」字）柱？ 風從何處來？ 雨從何處下？ 霜從何處出？ 露從何處起？

このような五字句は他の寫本には見られない。また、後半の韻文が始まる前の文章は次のように書かれている。

P.3754 ／羽 617
夫子共項託對答，不知項託；夫子有心煞項託，乃爲詩曰：

他の寫本では、多く「不知」の前に「一一」の二字がある。また、その「知」は正しくは「如」である。これらの一致とともに、その後ろに續く「夫」以下の十一字を正しく書寫している點でも兩寫本は一致する。
更に、兩寫本は同じ文を脱落している箇所がある。

P.3754 ／羽 617
項託入山遊學（P.3754 作「學遊」）問，不須受寄有何方。」

この文章は、「學」（P.3754 作「遊」）と「問」の間に「去，叉手堂前啓孃孃；「百尺樹下兒學」の十四字が脱落している。
次章に見るように、兩寫本の文字が必ずしもすべてにおいて一致するわけではないが、以上の特徴から考えるに、それぞれの祖本が近い關係があったことは想定される。
以上、S.1392 と P.3833、S.5530R と S.5530V、P.3754 と羽 617 を取り上げ、それぞれの寫本が近い關係にあることを指摘した。次に寫本間相互の關係や系統分類という枠組みでは考えにくい問題を取り上げる。

第四章　寫本間の差異の大きい文章について

「孔子項託相問書」は、上述の如く寫本間の關係が見出されるものがある一方、内容の差異が極めて大きい文章が複數存在している。本章では、その具體的な差異を取り上げる。

（一）項託の城作り

まず、項託が土で城を作る場面の文章が、寫本によって大きく異なる。この箇所を書寫する寫本は、S.1392、S.2941、S.5530R、S.5674、P.3833、P.3883、Дx1356+Дx2451、BD15450 の八點である。それぞれ以下のように書かれている。

S.1392
項託有常隨推土作城，在内如坐。
S.2941
……遂推土作城，在内而□……
S.5530R
項記有當……城，在内如坐。
S.5674
項託有□道□作土作□，□□□坐。
P.3833
項託有相隨推土作成，在内如座。
P.3883
……擁土作城，在内而坐。
Дx1356+Дx2451
項託有時當道聚土作城，在内而坐。
BD15450
項託有常遂推土作城，在内而坐。

敦煌文獻において「有」が「又」に通じることは一般的である。また、後半の「在内而坐。」の「而」と「坐」をそれぞれ「如」と「座」に誤寫ことも大きな問題ではない。重要な點は、項託の城作りの文章において、副詞が「常隨」「時當」「常遂」「遂」「相隨」等と一致しないこと、その後の動詞も「擁」「聚」「推」と一致しないことである。當時の人々が、それぞれ自らが書寫する寫本の文を理解できていたのか、またこの故事の正確な理解が共有されていたのかも問題になる。

（二）高山

孔子が項託にともに高山を削り平らかにすること等を提案するが（「吾以汝平却高山」）、項託は獸が生活できなくなると述べて拒否する（「平却高山，獸無所依」）。その問答の表現が寫本によって大きく異なる。この箇所を書寫する寫本は、S.395、S.1392、S.5674、P.3255、P.3754、P.3833、P.3883、Дx1356 ＋ Дx2451、Дx2352+羽 33 の九點である。孔子の表現と項託の表現をそれぞれ拔粹する。

S.395

「吾與汝掘却高山」／「掘却高山」
S.1392
「吾以兒捨却高山」／「捨却高山」
P.3255、Дx1356 ＋ Дx2451
「吾以汝掘却高山」／「掘却高山」
P.3754、P.3883
「吾以汝平却高山」／「平却高山」
P.3833
「吾與兒捨却高山」／「捨却高山」
Дx2352+羽 33 「吾以汝捨□高山」／「捨却高山」

S.5674 は孔子の言葉を書寫した文字が缺損しており、「吾以□……山」／「掘却高山」となる。P.3255 と Дx1356 ＋ Дx2451 に一致する可能性が高い。

「以」と「與」の混用、及び「汝」を「兒」と誤寫することはここでは問わない。それらを除外しても、寫本ごとに表現が大きく異なることは明らかである。「捨却」に作る寫本は S.1392、P.3833、Дx2352+羽 33 の三點であり、「掘却」に作る寫本は S.395、S.5674、P.3255、Дx1356 ＋ Дx2451 の四點であり、「平却」に作る寫本は P.3754、P.3883 の二點である。「平却」は、この會話の直前に、孔子が「吾與汝平却天下，可得以否？」と尋ねる文句があるため、その影響を受けた可能性がある。三つの表現のうち、本來の文句がいずれであったかは不明だが、このように多様な表現が、ほぼ同時代の同地區に流布した「孔子項託相問書」において見られることは、この故事の複雜な傳承のあり方を反映したものと言える。

（三）樹枝と母子

孔子が項託に「夫婦是親，父母是親？」と問うと、項託が「父母是親。」と答える。一度は孔子がその說を否定し、「夫婦是親。」であると述べるが、項託はそれを受けて自說の正しさを主張する。その言葉の中に、「一樹死，百枝枯；一母死，衆子孤。」との表現がある。この箇所を書寫する寫本は、S.395、S.1392、S.5674、P.3255、P.3754、P.3833、P.3883、Дx1356 ＋ Дx2451、Дx2352 ＋羽 33、羽 617 の十點である。それぞれいかに書かれたかを以下に擧げる。

S.395、Дx1356 ＋ Дx2451
一樹死，百枝枯；一母死，衆子孤。
S.1392
一樹死，伯枝枯；一母死，種子孤。
S.5674

一樹死，百枝姑；一母死，種子枯。
P.3255
一樹死，百伎姑；一母死，種（以下缺）
P.3754
壹樹死，百枝枯；□□死，種子孤。
P.3833
一樹四，百支孤；一母四，衆子孤。
P.3883
一樹死，百枝枯；一母死，種子孤。
Дx2352＋羽33
一樹死，枝葉枯；一母死，種子孤。
羽617
壹樹死，百枝葉枯；一母死，種子孤。

ここに見られる漢字は、概ね比較的早期の學習段階で學ぶものである。また、その量は僅か十二字に過ぎない。それにも關わらず、この言葉を正しく書寫するのはS.395とДx1356＋Дx2451に限られる。更に、その二點を除き、他の寫本はすべて文章が一致しない。

（四）發話者、常綠樹、誤字脱字等

次に、項託が孔子に尋ねる場面の一つを取り上げる。項託は、松竹等の常綠樹が何故常に青いのかを孔子に尋ね、孔子が答えるものの、項託はそれを否定する。ここでは、「松竹」という常綠樹の名稱さえ一定しない場合やこの會話の主語である「夫子」と「小兒」が入れ替わる寫本がある。本來は、はじめの問いかけは項託であり、それに孔子が答え、もう一度項託の言葉が續く。副詞の有無、常綠樹の名稱の異同、同義語の混用等があり、本來あるべき文章は求め難いが、概ね以下のような文章であったと考えられる。

小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能鳴浮？ 鴻鶴何以能鳴乎？ 松竹何以冬夏恆青？」夫子答曰：「鵝鴨能浮者緣脚足方，鴻鶴能鳴者緣咽項長，松竹冬夏恆青者緣心中強。」小兒答曰：「不然也！ 蝦蟆能鳴，豈猶咽項長？ 龜鱉能浮，豈由脚足方？ 松竹冬夏常恆青，豈由樑心中強？」

この文章を書寫した寫本は、S.395、S.1392、S.5674、P.3754、P.3833、P.3883、Дx1356＋Дx2451、Дx2352＋羽33、羽617の九點である。以下、この文章が、各寫本ではどのように書かれているかを列擧する。引用文の長さに鑑み、今回のみ

寫本ごとに特徴を記す。なお、煩瑣にわたるために、全ての問題點を指摘することは控える。

S.395
小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能浮？ 鴻鶴何以能鳴？ 松竹冬夏何以恆青？」夫子答曰：「鵝鴨浮者緣脚足方，鴻鶴鳴者緣煙項長，松竹各下恆青者緣心中強。」小兒曰：「不然！ 蝦蟆能鳴者由煙項長？ 魚鱉能浮者，豈猶脚足方？ 胡竹冬夏恆青，豈由心中強？」

この寫本は、孔子の答えにおいて、二度にわたって「能」を脱落する。常緑樹の名稱に「松竹」と「胡竹」が混在し、「咽」を「煙」と誤寫する。

S.1392
小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能鳴？ 鴻鶴何以能鳴？ 乎竹冬夏恆清？」小兒答曰：「鵝鴨能鳴者緣脚足方，鴻鶴能鳴者緣煙項長，松竹冬夏恆清緣心煙忠強。」小兒曰：「不然！ 蝦蟆能鳴者，由煙項長？ 魚鱉能浮者，豈由脚足方？ 松竹冬夏恆清者，豈由心中強？」

この寫本は、まず二度目の主語「小兒」が「夫子」であらねばならない。「鵝鴨」の動詞「浮」を「鳴」に誤寫するのは、次の「鴻鶴」の動詞と混ざったものであろう。常緑樹の名稱は、はじめ「乎竹」と書く。これは、「胡竹」の誤寫である。その後の二度の名稱は「松竹」となっていることから、主語の不一致が生じている。「青」を「清」と誤寫し、「心中」を「心煙忠」とし、「龜」を「魚」とする等、誤字が多い。

S.5674
小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能浮者？ 鴻鶴何以能鳴者？ 松百冬夏恆青？」夫子對曰：「鵝鴨浮者緣却足方，鴻鶴能鳴者緣咽項長，松百冬夏恆青者緣心中強。」小兒答曰：「不然！ 蝦蟆能鳴者，去遊咽項長？ 魚鱉能浮者，去遊脚足方？」

この寫本は、常緑樹を「松柏」とする。誤字については、まず「松柏」を二度とも「松百」と誤寫し、「豈由」を二度とも音通によって「去遊」に誤寫する。そして、最後の「去遊脚足方？」の後ろに書かれるべき「松柏冬夏恆青，豈由心中強？」の十一字が脱落している。

P.3754
小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能浮？ 鴻鶴何以能鳴？ 松竹冬夏恆清？」

夫子曰：「鵝鴨能浮者緣脚足方，鴻鶴能鳴者緣咽項長，松竹冬夏恆青者緣豈由心中強？」

この寫本は「淸」と「青」の誤寫がある。「松竹冬夏恆青者緣豈由心中強？」の「緣」と「豈」の間には、「心中強。」小兒答曰：「不然也！ 蝦蟆能鳴，豈由咽項長？ 龜鱉能浮，豈由脚足方？ 松竹冬夏恆青，」の三十四字の脱落がある。

P.3833
夫子又問小兒曰：「鵝鴨何以能鳴？ 鴻鶴何以鳴乎？ 松竹東下恆青？」小兒答曰：「鵝鴨能鳴者緣脚足方，鴻鶴能鳴者松竹東下恆青，豈由梁忠強？」

この寫本は、やや複雜な變化を起こしている。本來は項託がはじめに問いかけ、孔子がそれに答え、再び項託が答える順序であるが、いずれも主語が入れ替わっており、それぞれ孔子、項託、孔子の言葉とされている。そして、「鵝鴨」の動詞「浮」を「鳴」に誤寫し、二度ある「冬夏」をいずれも「東下」に誤寫する。「心中」を「忠」の一字に誤寫するのは、「心中」が上下顚倒し、更にそれが一文字につづまったのであろう。「由」と「猶」が相通じることは多くの寫本に見られることから、特に誤字と看做す必要はない。「鴻鶴能鳴者松竹東下恆青」の「者」と「松」の間に「緣咽項長，」の四字の脱文がある。更に、最後の「青」と「豈」の間にも、「者緣心中強。」小兒答曰：「不然也！ 蝦蟆能鳴，豈由咽項長？ 龜鱉能浮，豈由脚足方？ 松竹冬夏恆青，］の三十六字を脱文がある。

P.3883
小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能浮？ 鴻鶴何以能鳴？ 松柏何以冬夏常青？」夫子對曰：「鵝鴨能浮者緣脚足方，鴻鶴能鳴者緣咽項長，松柏冬夏常青緣心中強。」小兒答曰：「不然也！ 蝦蟆能鳴，豈猶咽項長？ 龜鱉能浮，豈猶脚足方？ 胡竹冬夏常青，豈猶心中強？」

この寫本は、全ての「恆」を「常」に作る。また、二度は「松竹」を「松柏」に作るものの、最後の項託の言葉では「胡竹」となっている。

Дx1356 ＋ Дx2451
少兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能浮？ 鴻鶴何以能鳴？ 松竹何以冬下恆淸？」夫子對答曰：「鵝鴨能浮者緣脚足方，鴻鶴能□者緣咽項長，松竹冬夏恆淸者緣心中強。」小兒答曰：「不然也！ 蝦蟇能鳴者，豈猶□項長？ 魚鱉能浮者，豈猶脚足方？ □□冬夏恆淸者，豈猶心中強？」

この寫本は「夏」と「青」をそれぞれ「下」と「淸」に誤寫する。「龜」を「魚」とする等の誤字もあるが、他の寫本に比して全體的に正しく書けている。

Дx2352 ＋羽 33
夫子又問小兒曰：「鵝鴨何以能浮？ 鴻鶴何以能鳴？ 松竹冬夏何以恆青？」
小兒答曰：「鵝鴨能浮者緣脚足方，鴻鶴能鳴者□咽項長，松竹冬夏恆青者緣心中……□能鳴者，由咽項長？……方？ 松竹冬夏恆青……。

この寫本は缺損のために確認できない文章があるが、確認される二つの主語がいずれも入れ替わっている點に大きな問題がある。

羽 617
小兒却問夫子曰：「鵝鴨何以能浮？ 鴻鶴……能名？ 松竹冬夏何恆淸？」夫子曰：「鵝鴨能浮者緣脚足方，鴻鶴能者緣咽項長，嵩竹冬夏恆青者緣心中強。」小兒答曰：「不然！ 蝦蟆能名者，豈由咽項長？ 魚鱉能浮者，豈由脚足方？ 嵩竹冬夏恆青者豈由心中強？」

この寫本は、鴻鶴の動詞「鳴」を二度「名」に誤寫する。常綠樹は、はじめ「松竹」とするが、後の二回はともに「嵩竹」に誤寫する。常綠樹に「嵩」字を用いる寫本は他に例がなく、特異な誤寫である。同系統の寫本である P.3754 も「嵩」には作らない。項託が孔子に問いかける文の「松竹冬夏何恆淸？」は「以」を脱落しており、「青」を「淸」に誤る。本來は「松竹冬夏何以恆青？」となるべきである。

ここまで、該當箇所を殘す寫本の翻刻を提示し、それぞれの特徵を見てきた。「孔子項託相問書」は、幾つかの文章に寫本間の差異があるとはいえ、ここまで多くの異同がある文章は珍しい。前章までに指摘した祖本や系統に關連が見出される寫本間にも大きな差が見られる以上、孔子と項託の對話の細部については、當時既に幾つもの異なる理解が存在していたと考えられる。

（五）『論語』の表現

最後に、（一）から（四）ほどには大きな寫本間の差は見られないものの、やや注目すべき文句を取り上げておきたい。孔子は項託との問答の最後に、「方知後生實可畏也！」と述べる。周知の如く、これは『論語』子罕第九にある「子曰：『後生可畏也，焉知來者之不如今也！』」を踏まえた文である。この箇所を殘す寫本は、S.1392、S.395、S.5529、S.5674、P.3754、P.3833、P.3883、Дx2352+羽 033、羽 617 の九點である。それぞれ以下のように書寫する。

S.395
夫子曰：「善哉！ 方知後生實可畏也！」

S.1392
夫子「方之後生實可委也！」
Дx2352+羽033
……實可畏也！」
S.5529、P.3883
夫子歎曰：「善哉！ 善哉！ 方知後生實可畏也！」
P.3754、羽617
夫子曰：「善哉！ 善哉！ 方知後生實可畏也！」
S.5674
夫子曰：「善哉！ 善哉！ 方之後實可得也！」
P.3833
夫子「方之小兒實可畏夜！」

『論語』は、寺院の童蒙教育に用いられる文獻であった。基本文獻に基づく表現であることも起因してか、多くの寫本が正確に書けており、本章が取り上げた他の表現ほどには差異はない。「知」と「之」、「也」と「夜」等の誤字だけであれば、音通によって正しく理解することもできるであろう。

注目されるのは、S.5529 と P.3883 に「歎」字が追加されていることである。これは孔子の心情を強調する表現として意圖的に加筆されたものであろう。S.1392 と P.3833 は、ここでも同じく、動詞「曰」と孔子の感嘆の文句「善哉！ 善哉！」をともに脱落し、「夫子「方之」に作る。ただし、誤字のあり方までは一致していない。S.5674 は、「知」と「畏」をそれぞれ「之」と「得」に誤寫し、「生」を書き忘れており、『論語』からやや離れた表現となっている。P.3833 が「後生」を「小兒」に作るのは、意圖的な書き換えの可能性も想定される。

このように見來たると、『論語』に基づく表現が、「孔子項託相問書」の傳寫の過程において變化する様が窺われる。

第五章　P.3883 の特徴

第二章から第四章までの指摘から分かるように、「孔子項託相問書」は、寫本ごとに多くの文字や文章に差があり、複數の寫本に共通の祖本を見つけることや、相互の系統分類を明確に指摘することが難しい場合も少なくない。このようにして傳寫されてきたこの故事を、より望ましい形で復元したり翻刻したりする際に起こる問題の一つが、底本の影響力である。王重民等編『敦煌變文集』（人民文學出版社、1957 年）をはじめ、從來の翻刻資料は、「孔子項託相問書」の底本を P.3883

としてきた。確かにP.3883はほぼ缺損がなく、狀態も良く、比較的正確に書かれている。しかし、そこには底本とされたために、却ってその文字や文章が過度に影響を與えてきた箇所がある。以下、四點にわたってP.3883獨自の點を指摘する。P.3883を底本とするにあたり、このような特徵を認識しておくことが、今後の「孔子項託相問書」の研究においても必要であろう。

まず、孔子が問いを立て、項託が答える場面の一つに次の場面がある。

> P.3883
> 夫子曰：「汝知屋上生松，戸前生葦，床上生蒲，犬吠其主，婦坐使姑，雞化爲雉，狗化爲孤，是何也？」小兒答曰：「屋上生松者是其椽，戸前生葦者是其箔，床上生蒲者是其席。（以下略）」

この内容を書寫する寫本は、P.3883の他に、S.395、S.1392、S.5674、P.3255、P.3754、P.3833、Дx1356+Дx2451、Дx2352+羽33の八點がある。これらの寫本を相互に比較すると、P.3883以外の全ての寫本が、孔子の言葉の「汝知」の前に「善哉！ 善哉！」の四字がある。つまり、いったん孔子は直前の問答における項託の答えを褒め讚え、その後に新たな問いを發したことになる。更に、やはりP.3883以外の寫本には、項託が答える文章に三度用いられる「者」字が一度も使われていない。

P.3883以外の文章を、寫本ごとの差異や文字の脱誤を織り込まずに翻刻すると、次のようになる。

> 夫子曰：「善哉！ 善哉！ 汝知屋上生松，戸前生葦，床上生蒲，犬吠其主，婦坐使姑，雞化爲雉，狗化爲狐，是何也？」小兒答曰：「屋上生松是其椽，戸前生葦是其箔，床上生蒲是其席。（以下略）」

次に、孔子が「鷄化爲雉」と「狗化爲狐」の意味を尋ねる文章では、P.3883が項託の答えをそれぞれ「在山澤也。」「在丘陵也。」に作る。この問答を書寫する寫本は、S.395、S.1392、S.5674、P.3255、P.3754、P.3833、Дx1356＋Дx2451、Дx2353＋羽33の八點がある。それらはいずれもP.3883の「在」を「近」に作っており、それぞれ文字の脱誤を除けば「近山澤也。」と「近丘陵也。」となる。

> S.395
> 「近山澤也。」「近丘陵也。」
> S.1392
> 「近小擇也。」「近丘陵也。」
> S.5674

「近山宅也。」「近丘陵也。」

P.3255

「□山澤也。」「近丘陵也。」（□に見える僅かな殘畫は「在」よりも「近」に近い。）

P.3754

「近山澤也。」「近丘陵也。」

P.3833

「近山擇也。」「近丘陵也。」

Дx1356 ＋ Дx2451

「近丘陵也。」（これは「近山澤也」の四字を脱落する。）

Дx2353 ＋羽 33

「近山澤也。」「近丘凌也。」

つまり、P.3883 を底本としてこの文句を「在山澤也。」「在丘陵也。」と翻刻してきたことは、P.3883 獨自の文章が反映されたことを意味する。

三つ目として、孔子が幾度も項託に言い負かされた後、項託を殺す決心をした場面を取り上げる。

P.3883

夫子共項託對答，下下不如項託；夫子有心煞項託，乃爲詩曰：（以下略）

この文章を殘す寫本は P.3883 以外に S.395、S.1392、S.5529、S.5674、P.3754、P.3833、羽 617 の七點ある。そのうち、S.395、S.1392、S.5529、S.5674、P.3833 の五點はいずれも「下下」を「一一」に作る。P.3754 と羽 617 はいずれの文句もない。つまり、「下下」に作る寫本は P.3883 に限られることになる。ここでは從來の翻刻は「下下」とし、「一一」を注記にまわす。

最後に、P.3883 のみに確認される脱文を取り上げる。孔子と項託の會話が終了した後の韻文に次の文章がある。

「我兒一去經年歲，百尺樹下學文章。」夫子乘馬入山去，登山驀領甚分方。

この文章を殘す寫本は、P.3883 以外に、S.395、S.1392、S.5674、P.3833、Дx1356 ＋ Дx2451、羽 617 の六點ある。それらは「夫子乘馬入山去」の前に、文字の脱誤や寫本の缺損を含みながらも「夫子當時聞此語，心中歡喜倍勝常。」の二句がある。このことから、P.3883 がこの二句を脱落させたことが分かる。これが單なる脱文であれば、それほど大きな問題ではないが、P .3883 の寫本を見ると、その後に續く「夫子乘馬入山去」を、後から小字で補筆していることが分かる。もし P.3883

を書寫する際に用いた底本に「夫子當時聞此語，心中歡喜倍勝常。」の二句があったならば、「夫子乘馬入山去」の一句を補筆する際に、併せて「夫子當時聞此語，心中歡喜倍勝常。」の二句も書寫したはずである。恐らく、P.3883 の底本となった寫本に既に上記の二句が失われていたのである。P.3883 の脱文は、底本を引き繼いだものと考えられる。翻刻集では、この二句は補われている。

以上、P.3883 に他の寫本と異なる特徵が見出される箇所を取り上げた。このように見來たるならば、これまでの翻刻の底本とされてきた P.3883 は、他の寫本と若干文章を異にする寫本であることが分かる。

P.3883 は、その寫本の狀態もよく、内容も完備しており、文字の脱誤は比較的少ないことから、この寫本が底本とされてきたことは十分に理解される。重要な點は、底本として一定の影響力を持つ寫本が、どのような特徵を持っているのかを理解することである。そうでなくては、實際には存在しない文章が定本において作り上げられたことを看過することになろう。

小結　「孔子項託相問書」を書寫する人たち

本稿では、「孔子項託相問書」の寫本には相互に具體的關係を有するものがあることや、一部の文章には寫本ごとに大きな差があることを明らかにし、P.3883 を底本として定本を作成することの問題等を考察してきた。このような寫本ごとの文章の差異は、他の敦煌文獻にもある程度見られるものである。しかし、「孔子項託相問書」の場合、文字や文章の脱誤が引き繼がれることによって、他に類を見ないほどに多くの差異を生じている。それは多くの場合、意圖的に文章を書き換えたのではなく、執筆者が依據した寫本に既に多くの脱誤があったためと考えられる。また、執筆者が十分な識字能力を有していなかったことや、そのような人々が相互に傳寫していったことも背景にあるのだろう。現在確認される執筆者が、いずれも學士郎であることは、その證左となっている。翻刻資料という定本作成の意義は、贅言を要しまい。ただ、そのような定本の利用とともに、寫本間の差異を踏まえた研究を行うことが、特に「孔子項託相問書」のように寫本間の差異の大きい文獻においては必要であるだろう。

本稿は敦煌文獻「孔子項託相問書」の漢文寫本のみを對象としたものであり、チベット語寫本との關係には及ばなかった。また、漢文寫本の考察においても、筆者が取り上げなかった詳細な問題、更には筆者の氣付いていない多くの問題が殘されているだろう。博雅の批正を乞う。

（作者は龍谷大學世界佛教文化研究センター研究員）